

---

# たった今、現代医学が敗北しました

回収屋

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

たつた今、現代医学が敗北しました

### 【Nコード】

N7298X

### 【作者名】

回収屋

### 【あらすじ】

Wii版バイオハザードのギャグパロです。各キャラの人間性はオリジナルとは異なり、完全に崩壊しております。御読みになられる際は正装（もしくは全裸）で御読みてください。より一層御楽しみいただけます。

## 序章

ラクーン市警に所属している特殊部隊・通称『S・T・A・R・S』<sup>①</sup>

ブラヴォーチームを乗せた捜索用ヘリが消息を絶つ

その事実が同市警のスポークスマンによって明らかになった

ラクーン市警の発表によると、昨夜、S・T・A・R・Sの同チームは遭難者が相次ぐアークレイ山地・ラクーンフォレストの現地調査に出動した

が、本日未明の通信を最後に……連絡が途絶えたこの事

同市警では何らかのトラブルに巻き込まれた可能性が高いとして、目撃者の証言を求めるとともに、今夕にもS・T・A・R・S・アルファチームを捜索に投入する方針となった

ラクーン郊外では近年、猟奇殺人事件が多発し話題になっていたが、今回の事件で一層住民の不安を招くことになった

連絡が途絶えたS・T・A・R・S・ブラヴォーチームの捜索に赴いたクリス等隊員達は、怪犬の群れに襲われ、洋館に逃げ込む

だがそこは……幾多のモンスターを生み出し、事件の原因を作った恐怖の研究所をカモフラージュするための館だった

館に閉じ込められたS・T・A・R・S・メンバーのクリ  
スとジル達は、脱出口を求めて彷徨ううちに、事件の真相を知ることとなる……………

> i 3 3 2 2 0 — 3 9 6 1 <

本作品には暴力シーンやグロテスクな表現が含まれます。

本作品に登場する人物・団体・クリーチャー等は実在のモノとは異なります。

本作品に使用される挿絵はプライバシー保護のため加工されています。

尚、作品内容を声に出して読む事はおすすめしません。御両親が泣きます。

墜ちないへりは、ただのへりだ

私の名は『アルバート・ウエスカー』。特殊部隊『S・T・A・R・S』のリーダー。実年齢よりずっと若く見えると、近所の奥様方からよく言われるナイスガイだ。チャームポイントは金髪のオイルバックと、愛用の黒のサングラス。今、私は非常に困惑している。何故なら……さっきまで私達が乗っていたへりが墜落し、目の前で派手に炎上しているからだ。運良く我々は大したケガもなく大破したへりから脱出できたのだが、これに関しては完全に予定外だった。当初の予定としては、私がへりに施した細工で突然の故障に見せかけ、山中に不時着させる手筈だった。が、神様のイタズラというか……悪魔の慈善事業というか……私の部下の一人、つまり、S・T・A・R・S・メンバーの一人が飛行中のへりの中で、いきなりオートマチックを発砲しやがったのだ。放たれた9ミリ弾はコントロールパネルに命中し、へりは完全に制御不能。なんとか当初の目的ポイント付近には降りられたが、危うく全滅するところだった。で、今からこの事態を引き起こした張本人に発砲した理由を聴こうと思う。

「おい、ジル……」

パアアアアアアア

ン！

「うわおッ!？」

その人物の名を呼びながら肩に手を置いたら、振り向きざまに撃つてきやがった。私は華麗にブリッジして回避したが、一体、何のつもりだ!？

「ああ、なんだ……ウエスカーか」

その女はそう言って辺りをしきりにキョロキョロしている。完全に落ち着きを失ったその様子から、よほどの事がへりの中で起きた



山中で野郎の尻を狙撃する敵国ってナニ？

「静かにしろ、クリス。まずは周辺に散乱した装備と物資を回収するんだ。その後、ここから北東2キロの地点にある洋館へと向かうぞッ！」

「わ、分かった。すぐに準備する！ おく、ヒリヒリしやがるううう……」

そう言っただけで自分の尻の状態をなんとか鏡で見ようと、体をひねってマヌケにクネクネしている男

『クリス・レッドフィールド』 25歳。血液型・O型。身長181センチ。体重80.5キロ。チームで？1の射撃技術を持つ実力者。元空軍パイロットで、アルファチームのヘリ操縦も務める。観察力、洞察力に優れ、実戦経験も豊富。臆する事を知らぬ精神力と、鋼の肉体を兼ね備えているが……

「げッ！ ウエスカー、マジでヤバイ！ さっきの狙撃でオレの尻が割れちゃった！」

「……………クリス、尻はみんな割れている」

「な、何だってエエエ！？ それじゃあ、みんなも既に尻を狙撃されたってワケか！？」

彼に悪気は無い。単に知能が他の人より極めて残念なだけなんだ。そう……………彼には悪気も罪も無いのだ。

「ちよっと、ウエスカー」

「何だ、ジル？」

「ここから北東2キロに洋館があるって……………どうしてそんなコトまで分かるのよ？」

しまった。私としたことが、ストーリーを進める事に気を取られて、とんだ失言をしてしまった。このままでは、この私が実はこの事件の黒幕の一人であるコトがバレてしまう。何とか騙し通さねばならない。そして、私はひらめいた。

「私のサングラスは特注だ。不可能は無い」

「なるほど。さすがだわ、ウエスカー」

自分で言うのもなんだが、今の適当過ぎる切り返しで納得すんなよ。この女、クリスに負けず劣らずのバカかもしれない。

(……………ん?)

急いで装備と物資を掻き集めていると、大木の陰に隠れるようにして立ち尽くしているオッサンを発見。私は一応声をかけてやる。

「おい、バリー。そこで何をしている？ もうすぐ出発するぞ」

オッサンは私に声をかけられ、一瞬、ビクッと全身を震わせた。で、何者かから狙われている被害者みたいに、辺りをキョロキョロと憔悴した面持ちで見渡している。

「お、俺は行かないツ。冗談じゃない……夜中にこんな山中を進むなんて、マツ DXの前でパンツを脱ぐようなもんだツ！」

例えの意味はよく分からないが、彼は完全に怯えきっていた。

『バリー・バートン』 38歳。血液型・A型。身長186センチ。体重89・3キロ。元SWAT。火器関係の知識が豊富で、隊内での火器の整備・補充を担当。モイラとポリーという二人の娘がおり、家族を大切にしている。けれど……

バサバサバサバサツ

！

「ふぎやああああああああああああああああああああああ  
ツツツ……」

バリー、絶叫。

「落ち着け！ 野鳥が羽ばたいたただけだ！」

オッサンは極度のビビリだった。カツと両目を見開き、口をアングリと全開にし、その場に力無くへたれこむ始末だ。

「よし、全員出発するぞ！」

真夜中の行進が始まった。これから先、我々の身にどのような怪現象や敵やトラップが待ち受けているか……私だけが知っている。

さつきも言った通り、私は黒幕の一人。今回はS・T・A・R・S・のメンバーを使って、アンブレラ社が開発したB・O・W・(生物兵器)と一定の環境下で戦わせ、その実戦データを記録するのが主な目的だ。そこから得られたデータはB・O・W・の更なる性能向

上につながり、アンブレラ社は“次なる段階”へと発展できるだろう。

> i333221—3961<

『アンブレラ社』 アメリカでの家庭用薬品シェア90%を誇る、全米?1の巨大複合企業であり、その裏の姿は、細菌兵器や生物兵器を開発する死の商人。

今回は、アンブレラ社が管轄する地下研究施設の一つに事故が発生し、施設及び、偽装のために建てられた洋館までもがウイルスに汚染された。で、アンブレラの上層部から私に指示が下ったワケだが………私には上層部の思惑とは別に目的がある。研究施設の最深部に保管されている、オリジナルの『T-ウィルス』を首尾良く奪取し、アンブレラのライバル企業への手土産とするのだ。今回得られるであろう貴重な実戦データとともに。

(ただ、問題は……)

私は隊列の先頭に立ち、チラツと後ろを振り返る。

「なあ、ジル。署内の連中がオレのこと見ながら、“ゴリラだゴリラ”って指差して言うんだけどさあ、どうしてだ？」

「脳筋でマツチヨで、デスクの引き出しに常にバナナを常備してるからよ」

バナナ片手に歩くクリス。おい……拳銃はどうした？

ロケラン担いで歩くジル。おい……いきなりソレはねえよ。

「やっぱ危ねえよ、ウェスカー！ 蚊に刺されてかゆくなくなったトコをかいで、そこからバイ菌が入ったり、野犬の遠吠えでビックリしてショック死するかもしれんッ！ なあ、引き返して救援を待とうッ！」

文句ばつかたれるバリー。おい……娘の写真を握り締めて泣くな。

(まあ、いい。洋館に着きさえすればどうにでもなる)

そう思いながら我々は行進を続ける。

私はアルバート・ウエスカ！。  
果たして、何人が明日の朝日を浴びられるだろうか。あるいは

## こういうヤツは大抵、次のシーンで死ぬ

やあ、みんな。私の名はアルバート・ウエスカー。前回のエピソードを読んでくれた人達は知っていると思うが、私は今、数名の部下を引き連れて真夜中の山中を行進している最中だ。クリス、ジルバリー……三名とも非常に有能な部下で、どれだけ有能なのかRP G風に説明すると、ラスボスの魔王相手に竹やり装備して突っ込んでいく勇者ぐらい有能である。

「なあ、ウエスカー……今、獣の唸り声みたいなのが聞こえなかったか？」

私の隣でショットガンを構え、しきりに周囲を警戒している男が小声で呼びかけてきた。彼の名は『ジヨセフ・フロスト』 27歳。血液型・B型。身長179センチ。体重72.3キロ。チームの整備技師。危険物取扱いなどの資格を持ち、車軸整備を担当。血の気が多く暴走気味な性格で、緊急時の行動には不安がある。ちなみに……もうすぐ死ぬ予定。何故なら、さつきから死亡フラグの乱立が止まらないから。B級ホラー映画で最初に死ぬ名も無い出演者と同様の空気をもし出しているし。銃を構えて周囲を警戒する仕草が全体的に小物っぽい。こういう輩は、見ている人達に最初のインパクトを与えるためだけに大概が犠牲になる。本人は悪くないが、犠牲になる。

<ん？ 何だ？ 何かいるのか？> <武器を構えてオロオロ  
> <な、何だ……気のせいかな……> <うわあああああああああああッ！！>

レギュラーキャラになれないヤツは、上記のような単純な流れで事務作業のごとく片付けられる。悲しいが、それが自然の摂理であり、それがゲームのプロデューサーの意向である。



ジョセフの喉元にガブリと食いついている。同時に、次々と別のゾンビ犬が草むらの中から跳びかかってきて、倒れているジョセフの腕や脚に食らいついていった。

(……………んん?)

ウェスカーが小さく首を傾げる。何だか……様子がおかしい。食らいついてはいるが、ジョセフからは特に出血している様子も、肉を食い千切られている様子もうかがえない。まるで、与えられたオモチャと戯れているみたいだ。

「わんわんおツ、久しぶりの獲物だおツ！ ゆっくり遊んでいくんだおツ」

ゾンビ犬なのに、妙に無邪気な笑顔だ。肉体の所々が腐敗し、片目なんか飛び出しちゃってるのもいるんだが、連中は教育番組のアニメキャラみたいな声でしゃべって、とっても楽しそうにじゃれている。

「ジョセフ！ 今、助けてあげるわツ！」

「待て、撃つんじゃない！ あれだけ密着した状態ではジョセフにも当たってしまう！」

オートマチックを構えて今にも引き金を引きそうになっていたジルを制し、私は冷静に観察することにした。

(おかしい……ヤツ等はもっと凶暴で、人など容易に噛み殺してしまっただけなんだが……もしか、野生化して何だかの突然変異でも起こしたのか!?)

キラ〜〜ン

考えのまとまったウェスカーのサングラスが煌めく。

キラ〜〜ン

ジルが手にするオートマチックの銃口が、月明かりに照らされて一緒に煌めく。つまり

パアアアアアアアア

ン！

撃ちやがった。銃弾は群がるゾンビ犬に……

「いつでええええええエエエエエエエ！ 畜生ッ、ジル！  
ドコに撃つてやがるッ！」

……いや、ジョセフに命中した。やはり、尻に。

「びつくりしたおッ！ ボク達はただ、人肉をハムハムするのが好きなだけなんだおッ！」

そう言つて慌てて散っていくゾンビ犬の群れ。逃げていくその後姿は何故だかキラキラしてて、外見がグロでさえなければ微笑ましい光景なのだが。

「あははははあああ〜　　まてまてえええ〜」

状況を勘違いしまくったクリスが、バンザイしながら爽やかな笑顔で追いかける始末。おい、止まれ。どれだけアクティブなムツゴロウさんだよ。

「追うんじゃない、クリス！ まずはジョセフの手当てが先だ！」  
私にとっては完全に予想外だった。完璧に死亡フラグが立ってたんで、ジョセフはここで“オラは死んじまったア〜”……になるハズだったのだが。

「おおっと、そうだった。おい、ジョセフ！ 傷の具合は……

こ、コイツはッ！」

「どうかしたの、クリス？」

「ケツが割れてるッ！ そうか……ジル、全てはオマエの陰謀だったんだなッ！」

「ああ……面倒臭い」

パンツ！

イラつとした顔でジルがまたしても発砲。

「うわおッ!？」

クリス、自分の尻を両手でかばいながら飛び跳ねる。

「……………おい、いいかげんもう行くぞ」

ゾンビ犬に追いかけて洋館に逃げ込むという算段は無しになったが、我々が洋館に行くという予定に変更は無い。

「ウエスカー……俺の事は気にせず先に行ってくれ。ケツが痛すぎ  
てまともに歩けそうもない……」

ジョセフの表情がとつても微妙。ゾンビ犬に食い殺されそうな光  
景にみまわれながら、結局、味方から尻を銃撃されてリタイヤ。

「安心しろ、ジョセフ。後で救助隊のへりに連絡しておく。ボラ  
ノール持参で急げとな」

私はそう言つてサングラスを不敵に光らせた。

「ああ、軟膏タイプで……よ、よろしく……ぐふっ……」  
ジョセフ、果てる。

「おい、バリー！　いつまで木陰に隠れている。走るぞッ！」

少し離れた所で、大木の陰から顔面を半分だけのぞかせてこつち  
をうかがうバリー……仲間を助ける気はハナっから無し。

「すまん、ウエスカー……俺もここでリタイヤだ」

バリーの額が大量の脂汗で濡れている。そして、股間も濡れてい  
る。

「ま、まさか……40前のオッサンがか!？」

バリー、家で帰りを待つ妻と二人の愛娘に何て言う気だ？　病氣  
もケガも無かったが、失禁はしてしまった……そう告白する気なの  
か？

(まさか、ここまでヘタレだったとは……私の考えが甘かった)

私は気まずい気持ちを胸にしまいながら、ゆっくりと踵を返した。  
さようなら、バリー。オマエも立派なメンバーだった。

パンッ!

「うわおッ!？」

バリー、木陰から跳び出す。いきなりジルに発砲されたから。

「全速力で走れよ。早く乾くかもよ」

このアマ、すべからず暴力で解決しようとしやがる。

と、いうワケで、私達はささやかな月明かりを全身に浴びな  
がら、呼吸を荒げ、鬱蒼とした山中を駆け抜けていく。そして、数

分後……到着した。

「こ、コレが……その洋館なのか？」

クリスが呆けた声で建物を見上げる。

「何か……禍々しい空気が漏れているわ」

目を細めて警戒するジル。

（さて、諸君。ここからが本番だ。しっかりと戦闘データを記録させてもらうぞ）

口元をわずかに歪めて微笑む私、ウエスカー。生か死か　この館の中で待ち受けているのは

「……………あ、ホントに乾いてる」

バリー、空気読め。

## 金持ちの屋敷Ⅱ デカイ・不気味・ダレもない

ギギギイイイイイイイイイイ……

正面玄関の大きな扉が、静寂に軋む音をたたせてゆっくりと開いた。

「これは……見事な豪邸だなあ！」

> i 3 3 4 7 5 — 3 9 6 1 <

私はわざと驚いてみせた。この洋館は、地下に建設されている実験場を隠すための大がかりなフェイク。そして、今から私のカワイイ部下達が死闘を演じる巨大な迷宮となるのだ。

「ちよつとオオオ〜、ダレかいるウウウ〜!？」

ジルが呼びかけてみた。不法侵入したにも関わらず、全く人が出てくる気配が無い上、物音一つしない。やたらと広い玄関ホールに四人の生存者。まさにホラーの王道的スタートだ。

「よし、まずは全員の装備と持ち物をチェックだ」

そう言っただけはクリス・ジル・バリーの三名と目を合わせる。この巨大な館の中には性能をある程度調節しておいたB・O・Wが、各ポイントに配置されている。全く武器を持っていない状態で館の中をウロつかれても、適切な戦闘データの回収はできない。部下達がどんな装備や道具を準備しているのか、上司である私がしっかりと把握しておかねば。で……

数分後

「……………おい」

私は床の上に片膝を落とし、“考える人”のポーズをとっていた。

床の上に陳列した持ち物一式に対する、私なりの最大のリアクションである。では、簡単に紹介しよう。

クリスⅡバナナ（黄色）、バナナ（黄緑）、バナナ（腐りかけ）、バナナ（ヌイグルミ）

「クリス、支給された拳銃はどうしたんだ？」

「すまん、家に忘れた」

「で、オマエのバックパック……何故、バナナだらけなんだ？」

「おいおい、ウエスカー。知ってるだろう？ オレが一定時間ごとに新鮮なバナナを摂取しないと、命にかかわる発作が起きるのを」

「いや、初耳だ」

「そうか。なら、今から説明を」

「いや、結構だ」

私はクリスの発言権をサラッと無視して、自分のホルスターから予備の拳銃を抜いた。

「コレを使え」

そう言っただけで私がクリスに手渡したのは、『ベレッタM92FS』。9ミリパラベラム弾が装填されたオートマチックの拳銃だ。そして、次……

ジルⅡケータイ、コスメポーチ、自爆スイッチ（乙）、自爆スイッチ（甲）

「ジル、さっきオマエがクリスとジョセフの尻を撃った拳銃はどうした？」

「ここに来る途中で捨てたわ」

「……………は？」

「だって、むさい野郎二人を撃った銃なんかもう使いたくないし」  
「じゃあ、最初っから撃つんじゃないよ。」

「で、どうしてケータイが？ 無線機を持つてるだろう」

「やだッ、ウエスカーったら知らないのオ？ 今はケータイで登録

しておくだけで生理日予測ができるのよ〜、ルナ ナで」  
何の心配してやがる。

「後……………『自爆スイッチ』ってサインペンで書かれている、この縄跳びの持つ手みたいなの装置は何だ？」

「ええつとねえ〜、（乙）を押すとクリスのヌイグルミが爆発して、（甲）を押すとウエスカーのサングラスが爆発するわ」

「あッ、危ねえエエエエエエエエエエ  
ッ！！！」

私はお気に入りのサングラスを思いっきり投げ捨てる。

「クリス、何してるッ！？ 早くその珍妙なヌイグルミから離れるッ！」

私はかなり焦り気味で警告する。

「ダメだ……………オレにはできない」

「……………は？」

「このヌイグルミは誕生日に妹からもらったプレゼントなんだ……………毎晩抱き枕として一緒に寝ているんだッ！」

クリス、エピソード的にはイイ話なんだが、使用用途が圧倒的に気持ち悪い。

「あひゃひゃひゃひゃッ！ うそうそつ、そんなの嘘よッ！ やつだもう、本気にしちゃってさあ！」

腹を抱えて笑うジル。このアマ……………ラクーン市警に戻ったら絶対減給してやる。

「仕方ない、オマエにはコレを渡しておく」

そう言っただけはサングラスをかけ直しながら、『コンバットナイフ（M9）』をジルに貸してやった。アメリカ軍に正式採用されている、自動小銃に装着できる銃剣だ。そして、最後に……………

バリー＝コルトパイソン、娘達の写真、遺書、紙オムツ（大人用）  
「一応、強力な武器を持ってきているのはいい。娘の写真も別に構わん。で……………オマエは遺書とオムツをセットで持ち歩いているのか？」

私はもうなんか、真面目に質問する気力が失せはじめていた。

「そ、そりゃそうだろ……常に危険と隣り合わせな仕事だからな。いきなりさつきみたいなの野犬に襲われて、心臓麻痺なんか起こした時のためだ」

バリーのハートはガラスどころか豆腐でできているようだ。

「で、この紙オムツなんだが……どうにかならんのか？」

「ま、まさかッ、使うなって言うのかッ!？」

バリー、本気でたじろぐ。どれだけ股間の括約筋が緩いんだよ。

「使うなどは言わんが、正直……オマエには恥や外聞を気にする余裕は無いのか？」

「あつてたまるか!!」

何で仁王立ちで威張るんだよ。

「まあ、いい。予備の弾薬なら私が少し持っているし、四人でかたまつて行動すれば何とかなるだろう」

私はサングラスを中指でクイツと直し、部下達に一瞥をくれた。

「で、これからどうするワケ? あたし達の任務はブラヴォーチームの搜索……だけど、夜間の山中はさつきみたいな野犬の群れが現れて危険よ」

ジルが私のことをキツと睨みつけながら言った。

「ああ、その通りだ。山中での搜索は明日の昼間に変更する。そして、今からこの館の中を隅々まで探索する」

「どうしてだ？」

クリスがマヌケな面で問う。バナナの皮をむきながら。

「もしかすると、ブラヴォーチームのメンバーが我々と同様にこの館にたどり着き、中を彷徨っているのかもしれない」

「な、なるほど……可能性はあるな」

バリーが頷く。紙オムツをはきながら。

「じゃあ、どうする? この玄関ホールからいくつか扉が見えてるけど、ドコから行ってみる?」

ジル、やる気を出してくれるのはかまわんが、ケータイでモバゲ

ーにアクセスするんじゃない。

「よし、まずは左に見えるデカイ扉の部屋からだ。いいか、今のところ人の気配は無いが、どんなアクシデントに見舞われるか分からん。各自、決して気を緩めるなッ！」

私は櫓を飛ばしてやる。

「おおッ！」

「了解したわッ！」

「た~~~~か~~~~の~~~~つ~~~~め~~~~!!」

おい、変なのが混じってるぞ。おそらく、家で娘達と観た深夜アニメに影響されたんだろうが、ここはあえて無視。

ガチャ

その大きな扉に鍵はかかっておらず、すんなりと開いた。

「へえ~~~~、どうやら食堂みたいね。人は~~~~いないようね」

最初に入ったジルが周囲を警戒しながら小声で呟く。

カッチ、カッチ、カッチ……………

年代物の柱時計が静寂の中で時を刻んでいる。

「だが、ドコかに人がいるのは確かだな。暖炉に火がついている」  
バリーの言う通り、潇洒な造りの暖炉の中で炎が燃え盛っている。

「気味が悪いなア……………さっきまで生活していた住人が、煙のように消えちまったみたいだぜ……………」

クリスが中央の大きなテーブルの表面を指でなぞり、ポツリと呟いた。その広い食堂は2階まで吹き抜けになっており、古めかしい内装だが丈夫な材質で建てられているせいか、破損や劣化の様子は見て取れない。

「おい、コイツを見てみる……………」

私はそう言っただけで暖炉の前の床を指差した。そこにはおびただしい量の血が水溜りを作っていて、暖炉の炎に照らされてより一層の不気味さを漂わせている。

「おいおい、マジかよ……………!!」

クリスが思わず息を呑んだ。

「どうやら、“アクシデント”ってのがもう登場したみたいね」  
ジルがナイフの柄を力強く握る。

「や、ヤバイ……は、吐きそう……！」  
バリー、よそでやれ。

(さて、頑張ってもらおうぞ 諸君)

私はこの後の展開に期待し、思わず口元を歪めるのだった。

死体を見つけたら、食べる前に通報してください

「よし、まずは二手に別れる。ジルとバリーでこの食堂をしばらく調査してくれ。私とクリスはこの扉から出て近辺を調べてみる」

そう言って私は、食堂に入って来たのとは別の小さいドアを指差した。

「いいの？ さっきは四人でかたまっただけで行動した方がイイみたいな事言っただけど」

ジルが少々心配そうに言う。

「心配ない。そう遠くにはいかない。搜索に時間がかかる場合、玄関ホールを中心になるべく安全地帯を確保して、一帯を拠点にした方が効率的だ」

「分かったわ。じゃあ、頼んだわよ。クリス」

「おお、任せておけ」

バタンツ

ドアが音をたてて閉まる。私とクリスは横に伸びた細長い廊下に出た。左か右か……私は当然、この洋館の内部構造を把握しているため、ドコに何の部屋があり、どんなトラップやB・O・Wが配置されているか知っている。

「よし、まずは左に向かおう」

私はそう言ってクリスに先に行くよう手で合図する。左に行った先は、さっきの食堂で食事をした者達がコーヒーや紅茶を楽しむ『ティールーム』になっている。が、現状は……

（さて、クリス……まずはオマエの緊急対応能力を試させてもらう）私はサングラスを中指でクイツとやりながら、自分の拳銃に手をかけた。

グチャ、グチャ、グチャ……………グシュウウウ

「な、何だ……？」

肉の塊を攪拌するような生々しい音がして、クリスの歩く足が止まる。

「お、おい……アンタ、ここの住人か？」

人がいた。クリスの方に背中を向けて、床に両膝をついて何かしている。妙だ……赤黒い染みで所々が汚れ、ボロボロに擦り切れた服。こんな豪勢な館に住む住人の姿とはとても思えないし、床一面に広がる液体は

「ま、マジかよッ　　！？」

おびただしい量の血だまりには一体の人間が倒れており、その人間の体にはいくつも食い千切られた痕が。

「なんてことだ……アレは、ケネスじゃないか！」

私は銃を片手に握りながら知らなかったフリを演じる。

『ケネス・J・サリバン』　45歳。血液型・O型。身長188センチ。体重96.8キロ。化学兵器に対する対策・防護専門。偵察、陣地確保といった危険を伴う任務につく。無口でチーム最年長、チームでは唯一の黒人系男性。彼は今　死んでいる。ダレがどうみても死んでいる。首の肉を食い破られているのだから。

「貴様、動くんじゃない！」

いきなりの惨状を目にしたクリスが、さつき渡したベレッタを手に

<うううううう……あアアアア……>

“ソレ”は乾いた呻き声を漏らしながらゆっくりと立ち上がった。そして、クリス達の方を振り向いたその顔は、どう見てもまともな状況にある人間の面ではなかった。髪の毛はほとんど抜け落ち、皮膚は青白く変色して所々が腐敗している。口元にはケネスのモノと思われる血がベットリとこびりついていた。

「どうした、クリス！？　こいつはどう見てもバケモノだ！　早く

撃て！」

「だ、ダメだッ……弾が出ない！」

「落ち着け、クリス！ オマエが構えているのはバナナだッ！ 十分に熟したバナナだッ！」

「し、しまった、緊張のあまり……オレとしたことが！」

ムキムキ……ムキムキ……

「これでよし」

「よし”じゃねえッ！ 皮をむいてる場合じゃないだろうがッ！」

モグモグ……モグモグ……

「食うなよッ！」

「し、しまった……オレの脳が制御しきれず……つい」

クリスの人生は脊髄反射の積み重ねのようだ。つまり、魚や昆虫と同じ部類。人類失格、バンザイ。

（こいつはヒドイ……ここはひとまず大食堂に退却だな）

戦闘データを記録するタイミングを失った私は、クリスの襟首を掴んで引っ張っていく。

バタンツ！

「ちょ……どうしたの、二人とも！？」

食いかけのバナナを喉につまらせながら引きずられてきたクリスと、慌てる私の姿を見たジルがおののく。

「き、気をつける！ この先にとんでもないバケモノがいた！ ケネスが食い殺されていたんだ！」

私はいつもより更に真剣な声で警告してやった。いきなり予定が狂ったが、こうなれば仕方がない。この大食堂にもうすぐ踏み込んでくるであろうさっきのバケモノ……ヤツにどう対応するか、ジルとバリーの分のデータも同時に記録するでしょう。

「ま、待てよッ、ウエスカー……“バケモノ”って一体、何のゴトだよ！？」

柱時計を調べていたバリーがコルトをホルスターから抜いた。☐

コルトパイソン』。高威力のマグナム銃で、357マグナム弾仕様のリボルバー式。

「確信は無いが、アレは……おそらく『ゾンビ』ってヤツだ」

『ゾンビ』 正確には“活性死者”と呼ばれる、T-ウイルスに感染した人間の初期段階。ウイルスによる遺伝子変質で新陳代謝が活発化しており、強靱な力や、銃で撃たれても死なない体力を持つに至るが、同時に細胞の壊死サイクルも早くなるため、外見は所々が腐り落ちた死体のようになっていく。ウイルスにより前頭葉が破壊されるため、思考力はほとんど無く、代謝の増大に伴う激しいエネルギー消費から常に強い飢餓感を抱え、食欲を満たそうと食物を求めるだけの存在。感染前の習慣、記憶は多少残っているが、思考能力を失っているため、行動は自分に関わりのある場所を徘徊したり、ドアの開閉を行う事のみにとどまる。

「ゾンビですって？ モーダー、アナタ疲れてるのよ。ゾンビなんて架空のモンスターが現実存在するはずがないじゃない」

スリー……いや、ジルが半分呆れた感じで言う。

「い、いや、マジだって！ オレもケネスが食われてるとこ見たし！」

クリス、慌てながら次のバナナの皮をむくんじやない。

ギイイイイイイイイ……………

ノブが回り、小さなドアがゆっくりと開く。そして、半開きになったその隙間から “ソレ” は又ツとその威容を現した。

> i 3 3 5 9 4 — 3 9 6 1 <

「ほんぎゃああああああああああああああああああああ  
あ ツツツ！！！」

バリー、大・絶・叫。と、同時にジルが  
「せいやッ!!」

パンツ!

ドアめがけて跳び蹴り。当然、大食堂の中に入りかけていたソイツは、ドアと壁の間に思いつ切り挟まれるワケで。

<あアアアアアアア　　うちッ!!>

ゾンビが痛がつとる。

<いきなり何しはりますのオ〜ん！　わてが食事中に後ろでバタ騒がしいから、こうして様子見に來ただけですやん〜!>

しかも、流暢にしゃべってる。

「クリス、コイツがそうなの?」

「あ、ああ……ソイツに間違いない」

「ふ〜ん、見た目は確かにグロいわね。けど、ホラーメイクか何かじゃないの?」

ジルはグイグイと脚に力をこめながら、目を細めてゾンビの方を睨みつけている。

<おツ、よ〜見たらキレイなネーチャンがおるやないけッ!　どうや?　わてと一緒に腐乱ス料理でも食わへんか?>

ダジャレまで飛び出す始末だ。

(一体、どうなっているんだ……外のゾンビ犬といい、このゾンビといい……T・ウィルスが想定外の方向に進化したのか?)

私は少々考え込んでしまいそうになったが、ここは一先ず撃退しなくては。

パンツ　パンツ　パンツ　　!!!

ベレッタを構えて連射。ゾンビの頭部に全て命中する。

<あうッ、あうッ、イタタタッ!　何すんねん、このガラスンオヤジガッ!　そんな危ないモン撃つてきはったら、わて死んでしまっがなッ……って、あ、わてもう死んどるわ>

おかしい。胴体ならともかく、頭部にあれだけ9ミリ弾を食らっ

てまだ倒れないとは。

「コイツならどう!?」

ザクッ

コンバットナイフをドア越しに突き立てるジル。その刃先はゾンのデリケートゾーンにヒット。

<おおおおおお

うちっ!!　　そ、それはあきまへん

わあ〜〜……人間はやめても男は廃業したくありまへんでえ〜〜…

…>

ドサッ

倒れた。股間を両手で押さえながら。

「さすがだぜ、ジル!」

クリスが親指立てて笑顔。

「見たかッ!　署内で“泌尿器スレイヤー”と陰口叩かれるあたしの実力ッ!」

ジルが中指おっ立てて笑顔を返す。おい……一体、署内で何やってやる。

(どうにもおかしい……イヤな予感がしてきた)

私の頬を不吉な汗が伝う。このまま館の探索を続行してもいいものなのか?　B・O・W 達のこの変貌ぶり……計画に多大な支障をきたすのでは?　だが、もう後には引けない。私は自分の仕事を全うし、必ず成果をあげてみせる!

「うっ……うっうっ……ボ、ボツシユート、です……」

失神したバリーが後ろの方で意味不明にうめいていた。

## 鉢植えの植物を引っっこ抜くという発想

「これは……………ヒドイわね」

ジルが片手を自分の口元にあてがいがら呟いた。彼女の目の前には、首を食い破られて果てたケネスの遺体が横たわっており、恐怖にひきつって両目をカッと見開いたままになっている。実に無念な最期をとげたようだ。

「狂ってやがる……………ゾンビか何か知らんが、人間を食い殺すなんて正気の沙汰じゃねえよ」

そう言っただけでケネスはケネスの遺体の傍でしゃがみこみ、遺体の状態を観察する。

「クリス、何か他に変わった所はあるか？」

ズリズリ……………ズリズリ……………

私は気絶したままのバリーを引きずりながら、クリスに問う。

「……………ん？ 何か手に持ってるぞ」

クリスがケネスの手に握られていた物体を発見する。ソレは

『フィルム』だった。おそらく、この館の中を撮影したものだだろう。再生するための設備があれば、中身を確認してチームメンバーの捜索に役立つかもしれない。

「よし、フィルムは私が預かるぞ。全員、先に進むぞ」

私はケネスの猟奇死体が視界に入らぬよう、バリーに目隠しをしてやってから、彼の頬をペチペチと叩いて起こしてやる。

「バリー、しっかりしろ。探索を続けるぞ、立てるか？」

「……………んんッ、う……………う……………ん？」

バリーが目を覚ます。オハヨウ、役立たず。

「うわああああああッッッ！ ま、真っ暗だアアアアア！  
ついにこの世が終焉を迎えてしまったアアアアア……………げ

ふッ

バリーが再度失神する。オヤスミ、役立たず。  
「仕方ない。バリーのメンタル面が回復するまで、ここに寝かせておくでしょう」

そう言っつて私は気絶したバリーを優しく寝かせてやった。ケネスの死骸の隣に……。

> i 3 3 7 1 4 — 3 9 6 1 <

バタンツ

ティールーム真横にあるドアを開くと、薄暗い廊下に出た。

「ん？ 何よ……コレ？」

廊下を行つた先には階段が見えており、その手前に少し開けた空間があつて、小さな棚のような家具の上に鳥カゴが乗っていた。

「真つ黒な羽が幾つも落ちてるな……カラスでも飼つてたのか？」

クリスが辺りに散乱している羽を指でつまみ上げ、渋い表情になつている。鳥カゴでカラスを飼う。もし、事実なら、この洋館の住人はどうしようもなくイカレている。だからなのか……さっきのようにやたらとハイテンションな死体もどきが居るのは。

「クリス、ジル、その鉢植えに生えている緑色の植物を調べてみる」

私はそう言つて、階段のすぐ脇に並んでいた二つの鉢植えを指差した。ソレは『グリーンハーブ』。アークレイ山中に自生している特殊な植物だ。どう特殊なのか、私の口から説明したいところだが、そうしてしまうと「何故、そんな効果まで詳しく知っている？ ま、まさかツ！？」 っつてなコトになりかねない。だから、ここはクリスとジルの両名にそれとなく使用用途を教えてやらねばならない。いくら特殊部隊の精鋭達とはいえ、この洋館の制圧だけでも無傷で済むワケはないのだから。

「何よ、ただの観葉植物じゃない」

「そうだな。特に変わったトコは無いな」

二人とも全く関心は無し。まあ、それが普通のリアクションだ。グロテスクなバケモノが出没するような館に生えている植物を使って、体力やケガの回復を図ろうなんて発想……その人間の良識を疑いかねない。

「まあ、待て待て。これ見よがしに並べてあるという事は、何か意味があるはずだ」

私は疑惑が持たれないよう、自分のバックパックからおもむろに携帯端末（PDA）を取り出して操作した。

「多分、コレだな。うん、間違いない」

「一体、何なのよ？」

「コレを見てみる」

私はジルにPDAを手渡した。モニターにはアークレイ山中とその近辺に自生する、珍しい植物の一覧が映っている。

「ええつと……」『グリーンハーブ』？ 使用することで体力を少々回復できます。他のハーブと組み合わせることにより、別の効果を発揮する場合も」

ジルはモニターを見つめながら、鉢植えからグリーンハーブを摘んだ。

「ふ〜ん……で、どうやって使うんだ？ やっぱ“ハーブ”って言うくらいだから、お茶にいれたりして飲むのか？」

クリスが小さく首を傾げた。そう……実のところ、そこが一番の問題なのである。私としても、このハーブの使用方法には多少の疑問点を抱えているのだ。

ハーブの正しい使用方法（例）

？ 煎じて飲む（専用の道具一式が必要になってしまう）

？ 豪快に生食い（確実に消化不良を起こす）

？ 潰して汁を傷口に塗る（一番現実的だが、塗ってすぐ傷口が

治癒したらソイツこそバケモノ)

? 嗅ぐ(ダメージ受ける度に葉っぱの臭いをクンクンしてる画が、ヤバイ中毒患者に見えてしまう)

? 目に入れる(単に痛いだけ)

「各自で好きに使え」

私は迷ったあげく、放任主義をきめこんだ。

「よし、それじゃあ行くか」

ハープを分け合い、目の前の階段を上り始める。

ギシギシ……

「アン アン」

ギシギシ……

「アン アン」

ジル、妙な擬音を呟くんじやない。発想が完全にオッサンだ。

ボタンッ

階段を上った先にはドアがあつて、開けると壁に小さな松明がある廊下に出た。ドアのすぐ右には別の通路が続いており、そちらの通路の突き当たりの所に大きな鏡があつて、その鏡に

「出やがったなッ！」

クリスが身構える。鏡に映る少々小太りの動く死体。ゆっくりと歩を進め、こつちへ向かっている様子が分かった。

パンッ!

クリス、発砲。

パライイイイイ ン!

割れる鏡。

「ぬッ、しまった! 残像かッ!？」

残像どころか別の物体に向かって撃ってるし。オマエは鏡の機能に戸惑う小学生か?

<いらつしゃあ〜い! 久しぶりのエモノ、三名様ご案内やでえ〜!>

またしても妙に元気な歩く死体。クリスめがけて楽しそうに襲っ

てきやがった。

「近づくんじゃねえッ！」

ボゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

ツツツツ！！

クリス、殴った。素手で。

くうつひよおおおおおおおッ！ 胴体さんサイナラあゝゝ！>  
ゾンビの頭部が見事にブツ飛ぶ。

「やるわね、クリス。ゴリラパワーはやっぱ伊達じゃないわ」

ジルが微笑みながら親指立てたりしているが、クリス……頼むから普通に銃を使ってくれ。まともな戦闘データがとれん。

「ここはクリアだ。隣の通路から進もう」

今度は私が先頭になって、左右の壁に沢山の細長い槍が立てかけられた廊下に行く。壁に設置された小さな松明の灯りが反射して、なんとも不気味に煌めいている。そして、その通路の途中で、一体の小さな石像を発見。石像は『黄金の矢』を携えている。

「ジル、その矢を回収するんだ」

「は？ …… どうしてよ？」

確かに不自然な指示だ。不法侵入した上、人の家の高価そうなオブジェを持っていこうとしている。行為自体はコソドロのソレと変わらない。が、各ポイントに設置されている様々なアイテムを回収し正しく使っていないか、このミッションそのものはおろか、館の制圧すら不可能なのだ。精密な戦闘データを正しく記録するため、ドコに何を設置してどんな仕掛けを作動させるか……どんなタイミングでどんな資料等を発見させるか……全て緻密に計算し配置したおかげでカナリの自腹を切った（ドンキで小道具買ったりして）。有給休暇もほとんど使い果たした（私は毎日何をやっているのだらう……そう思いながら）。そんな私の地道な努力を、いきなり徒労に終わらせるワケにはいかない。

「証拠物件の押収だ。この館で我々のメンバーの一人が殺されていたんだ。裁判で有利になるに越したことはない」

「なるほど、さすがはウエスカー。抜け目が無いわね」

ジル……騙す私が言うのもなんだが、オマエは簡単に納得し過ぎ。「よし、次はこっちのドアから行くぞ」

我々から見て正面と右側にドアがあり、私は右側のドアを警戒しつつ開ける。同じ頃

「う、うゝん……あ、あれッ……皆、ドコだッ？」

ティールームで置き去りにされていたバリーが、気絶から目を覚ました。周囲を見渡しても仲間の姿は確認できず、代わりに……ケネスの変わり果てた姿がすぐ隣でコンニチハ。

「……………死いゝねゝばゝイイのに 死ねばイイのにッ

ドコかゝ遠いゝトゝコゝロで」

ついにバリーが壊れた。珍妙な歌を口ずさみながら、大食堂の方にヨタヨタと歩いて行ってしまった。

親方あゝ、空から女の子（石像）が！

我々は広めのスペースに出た。どうやらここは、吹き抜けになっている大食堂の2階部分のようだ。1階の大食堂を上からグルッと取り囲むようにして、狭い廊下のみがあつて特に目立つ障害は

<うううう……あああ……>

いや、あつた。少し離れた所にゾンビが一体徘徊しているのが確認できる。

「よし、これはチャンスだ。これだけ離れていれば、安全に銃で倒せるハズだ。クリス、今度こそ頼んだぞ」

「おおッ、やってやるぜッ！」

勇ましくベレッタを構えたクリスに対し、我々に気づいたゾンビがゆっくりと迫つて来た。

パンツパンツパンツ！

9ミリ弾が三発命中するが、ゾンビの歩みは止まらない。

「くそッ、こっちに来るんじゃねえッ！」

更に顔面にも二発命中させたが、まだ怯む様子は無く、どんどんクリスとの距離を縮めて前につんのめるようにして覆い被さつてきた。

<捕まえたでえ……このクソガキ……！人の家に何しに来よつたんや？ はっはあ……野郎二人に若い女が一人。このスケベ共がッ！よそ様の家で盛っちゃいけませんって、お母ちゃんから習わんかつたんかッ！？>

いきなりゾンビから説教された。

「ワケ分かんねえコト言つてんじゃ……ねえよッ！」

マズイ。体勢が整つてない状態でガツチリと組みつかれたため、上手く引きはがせない。このまま力任せで引きはがそうとすれば、ゾンビの鋭利で不潔な爪で裂かれるかもしれない。どうすれば

！？

「クリス！ 真横の柵に何かあるぞ！ ソイツを使え！」

私は苦戦するクリスに大声で教えてやった。

「んツ？ お……コイツは……！」

左の壁に造られた簡易柵から、キラツとシャンデリアの光が反射してきた。その光は柵に置かれた一本のダガーナイフからのものだった。『ダガーナイフ』。ゾンビの噛み付きや即死系のつかみ攻撃を受けた時に使用できる、ディフェンスアイテム。

「これで ツ、どうだツ！！！」

グサツ！

ダガーナイフを掴み取ったクリスが、ゾンビの側頭部めがけて勢い良く突き立てた。

くちつくしょオオオオオオ

ツツツ！ この世のリア充

全員爆発しいやアアアアアア

ツツツ！>

ドサツ……

恨み言を吐きながら倒れた。

「全く……ここはとんでもない館ね。こんなのがまだ他にもいるのかしら？」

ジルが倒れたゾンビを足のつま先でツンツンしながら呟く。

「分からん……だが、普通の状況でないのは確かだ。ここから先も油断できん」

そう言っつて私は二人を先導し、廊下を半周回ったところで立ち止まった。我々の前に一体の石像が佇んでいる。女性をかたどったスリムな石像だ。

「ジル、この石像……何か怪しくないか？」

私はここぞとばかりに彼女の観察眼を試すことにした。実はこの石像の中にアイテムの一種が埋め込まれており、外からは確認できないのだが、叩き壊すことによつてそのアイテムを回収できる仕組みになっているのだ。

「ええ、確かに怪しいわ。この胸……きつと豊胸手術済みね」

石像が美容整形してどうする。



盛っているが、柱時計の時を刻む規則的な音が静寂に響くだけで、  
ダレかが戻ってくるような気配も無い。

（なんてこった……まさか、俺って置き去りにされたのか？ 待て  
よッ……あるいは、他の三人が何者かに連れ去られたという可能性  
も！？）

ウロウロ……ウロウロ……

様々なマイナス思考が脳内を彷徨い始め、彼自身も大食堂内を意  
味無くウロつきだす。そして、壁際に置かれていたアンティークの  
壺の中を片目でのぞき、「お〜い、もし中に居たら返事してくれ  
え〜〜！」  
なんて言い出す始末。もはや、末期症状が出ている。  
そんな時……

ゴトツ

（えッ……何だ……？）

何か重量のあるモノが動いたような音が自分の頭上の方からして、  
思わず仰ぎ見た。

「マジですか？」

我が家で待つ妻よ、娘達よ……生命保険の加入を断られた父さん  
を許してくれ。あと、皆の事はもちろん愛して

ズゴンッ！！

残念ながら走馬灯は途中退出し、バリーの頭上にデカイ石像が降  
ってきて 命中。

ドサッ……

俯けに倒れ伏すバリィ。そして、上の方から聞こえてくる声。

「おい、今……何かにぶつかったような音がしなかったか？」  
クリスが不安を覚えて下の方をのぞき見た。

「げッ、バリーが倒れてるじゃない！」

一緒に下をのぞいたジルが指差して言う。

「おいッ、バリー！ 大丈夫かッ！？ 動けるかッ！？」

私は大声で呼びかけてやったのだが、彼は割れた額からドクドクと大流血してて、小さな呻き声を上げるだけでまともに反応していない。

「これって……オレのせいなのか？」

「確かに石像落としたのはクリスマスだけど、やれって命令したのはウエスカーよね」

二人の鋭い視線が私を射抜く。この空気はもしや “責任のなすり合い” か？

「だが、よく見てみる。割れてバラバラになった石像を」

私はそう言っている一点を指差した。そこには燭台の灯りをキラキラと反射させる、一個の物体が見てとれる。それは 『青い宝石』。

「わア〜お でつかいダイヤが落ちてんじゃん！ 早速、証拠物件の押収といきましょうよ！」

ジルが手の平を合わせて大歓喜。彼女の瞳には“物欲降臨”の文字が。

「慌てるな。アレを拾いに行くのはまだ早い。少しの間あのまま放置しておくんだ」

「ええッ、何でよッ！？」

ジルがあらん限りの力を込めて私につかみかかってくる。オマエ……自分が警察であるという自覚あるか？

「きつと、非常に高価なモノに違いない。あのままにしておけば、この館の住人か、あるいはこの異常な状況を生み出した犯人が出てくるかもしれん」

「なるほど……さすがね、ウエスカー。やっぱりあたし達とは頭のキレが違うわ」

またしても適当な思いつきを述べてしまったが、部下達は納得し

たようだ。コイツ等、なんて純真無垢なハートを持っているんだ……  
……バカだけど。で、上の方で我々が騒がしくしている間、下の方では

は、はやく……た、助け……ろ……よ……

ガクッ……

最後の力を振り絞り、床に血文字を書き残したバリーが果てた。

**墓場の死体も復活するのなら、刺身も動き出すのかな？**

「よし、次はこつちだ」

我々は業務上過失致傷で動かなくなつたバリーをさりげなく見捨て、玄関ホールの上階に続く大きな扉を開く。

「なあ、ウエスカー……オレ達って結構この館の中歩いてるけどさあ、一向に住人らしき人達に会ってないんだが」

「何が言いたいんだ、クリス？」

私は足を止めて彼の懸念に満ちた顔を睥睨する。

「もしかしてよお、あの“ゾンビ”ってヤツが“住人”だったんじゃないか？」

コイツ、なかなか良い勘をしている。野生の勘とでも言うのだから、そこいらのゴリラとはワケが違うようだ。バナナは欠かさず食ってるけど。

「確かに……可能性としてはありうるな」

私は軽く頷きながら玄関ホールの中央階段にある、墓石の絵が描かれたドアを開いた。

「外に出た……？ いいえ、違うわね」

ジルが月の見えない夜空を一瞬だけ仰ぎ見てコンバットナイフを抜いた。

「ここって……もしかして墓場か？」

外に出たのは確かだったが、周囲には頑丈そうな鉄柵が張り巡らされており、苔生した石畳が広がっている。一面に見えるのはダレのモノとも分からない沢山の墓石。風雨にさらされてすっかり汚れており、欠けたり傾いて倒れそうになっているモノもある。

「行ってみよう。館の敷地から安全に出るための脱出経路が確保できるかもしれん」

私はそう言つて目の前の石の階段を下り始めた。

「こりゃあああああッッッ！ 死者の眠りを妨げるヤツ等に

は、わてが死人代表として天誅を加えるんやでえ〜！ 手の甲をキユツとつねつたりして痛くしたるう〜！>

さすがは墓場。当然のようにゾンビが居て、こっちに向かって来た。

「うるせーよ、こっちこそ痛くしてやるぜツ！ ゴリラ代表としてなッ！」

クリス、ついに自分で認めやがった。  
スタンツ

少し助走を加え、石畳を軽いステップで蹴り、闇夜にクリスのガチムチボディが舞った。

> i34003 — 3961 <

ドゴオオオオオオオオオオオ

ツ！！

< あべしいいいいいいい〜！? >

クリスの豪快なドロップキックを食らい、ゾンビがボロ雑巾のように吹き飛ぶ。

「クリス……頼むから銃を使ってくれ。危なっかしくて仕方が無い」

「すまねえ、ウェスカー。外の空気に触れた途端、オレの中で何かよく分からない……そう、“本能的なモノ”が暴れ出したんだッ！」

マズイ。クリスが明らかに野生に目覚めかけている。これはあくまでB・O・Wとの戦闘データを記録するのが趣旨であり、クリスのゴリラ化観察日記ではない。

（まあ、いい。近い内に肉弾戦ではどうしようもない相手も出るしな）

私は頭の中で今後の展開を整理しながら、クリスとジルを引き連れて雑草が生い茂った墓地の中を突き進み、少し行った所でピタッと足を止めた。

「ジル、こいつを見てみる」

そう言って私は一つの墓石を指差した。その墓石には天使の絵が彫られており、天使の持つ弓矢の矢じり部分にくぼみがあった。

「『弓矢』……………はっ、もしかして！」

ハツとしたジルが館の中で回収した『黄金の矢』をバツクバツクから取り出す。さすがだな、ジル。中々の洞察力だ。その矢の矢じりを外してだな

ブスリッ！

「……………おい、ものすごく痛いんだが……………」

何を思ったのか、目の前のクソアマは私の脳天に矢を突き刺しやがった。もちろん、血が出る。ピュ~~~~ってなってる。ピュ~~~~って。

「えッ、違った？ 矢でダレかをやっちまえば、天使が降りてくるっていう流れじゃないの？」

平然と言ったのけやがった。“ダレか”って……………オマエ、全く迷うことなく私に突き立てたよな？ なんか私の事嫌ってる？ プライヴェートとかで気に入らない事でもした？

「い、いいか……………この矢の矢じりを外して、墓石にあるくぼみにはめ込むんだ。そうすると……………」

ゴゴゴゴゴゴオオオオオオ

墓石が重厚な音をたたせながらスライドし、そこに地下へと続く階段が現れた。

「す、すげえ……………よくこんな仕掛けが解ったなあ、ウエスカー！」

理科の化学実験している小学生みたいに、私の後ろでクリスが驚いている。

「地下室の開閉にこんな仕掛けを施すなんて、この下はカナリ怪しいわね」

ジルが息を呑んだ。

「ああ、その通りだ。油断するなよッ」

我々はチラチラと揺れている淡い灯りが差してくる地下へと下りる。そこは墓場と同様に石畳になっており、壁も天井も大きさがまばらなレンガや石で造られていた。

カタカタカタ……カタカタカタ……

天井から吊り下がった大きな鎖が動き、滑車や歯車が回っているような音が響いている。何かを作動させるための造りなのだろうか？ 壁には暖炉のようなモノがあつて、その中の炎が周囲を不気味に照らし出していた。

「一体……何なのよ、コレって？」

「イヤな寒気がしだしたぜ……ブラヴオーチームの連中、無事だといいいんだが」

ジルとクリスの懸念はもつともだった。むやみにデカイ洋館だけならまだしも、こんな目的不明な地下室を墓地の下に造るようなヤツが館に居るとすれば、明らかに尋常な精神の持ち主ではない。

「二人とも、アレを見てみる」

私が地下室の端っこ辺りを指差して言う。そこには円形状のテーブルみたいな石碑があつて、その表面にあるくぼみに一冊の『本』がはまつた。

「コレって……“呪いの書”って書いてあるわよ」

ジルが思わず眉をひそめた。

「何かの手がかりになるかもしれん。回収しておこう」

そう言つて私はその本を手に取り、何気なく裏表紙を見てみた。

「ジル、こんなモノがあつたぞ」

本の裏には簡単な造りの金具が付いており、そこに1本の鍵がはまつていたのだ。もちろん、この仕掛けも私の美的感覚が生み出した細工である。

「もしかすると、館の中で使えるのかしら？」

「かもしれない。こんな所に隠してあつたくらいだ。きっと、入られ

てはマズイ部屋の鍵に違いない」

「なるほど。つまり、30代独身男性の汚部屋とか、メイド喫茶の休憩室とかがあるワケね」

ジル、言いたい事はよく分からんし、オマエ……何か変なバイトとかしてないだろうな。

「お〜い、こっち来てくれ！ 妙なモン見つけたぜ！」

別の箇所を調査していたクリスが何かを発見してこっちに手を振っている。そこには

「うげえ〜……趣味悪う〜……」

ジルが毒づく。壁に埋め込まれるようにして作られた石像が四つ。横並びになって佇んでいる。それは『仮面』で、目・鼻・口に穴があいていた。

「ふむ……おそらく、今手に入れたこの本に書かれているメッセーヂ。コレのことだろう」

本にはこう記されている。

四つの仮面、すなわち、『口無き仮面』・『鼻無き仮面』・『目無き仮面』・『三つ全て無き仮面』、全ての仮面が揃う時、災いは再び蘇る

「災いが蘇るって……何て不吉なんだよ。オレって結構迷信深い方なんだ。こんなトコ、早くオサラバしたいぜ」

クリスが急にソワソワし始める。だが、実際のところ、この石仮面や本に霊的な由縁などない。これもまた、隊員達の観察力や分析力を試すギミックの一つに過ぎない。

「ウエスカー、あたし気づいちゃったわ」

ジルが独り言のように呟いた。

（おおッ、ついに事の真相に勘付いてくれたかッ！？）

私はサングラスを中指でクイツとやりながら、彼女の方に向き直った。

「ここに並ぶ四つの石で出来た仮面に、それぞれ該当した仮面を装着させることによつて……新しい仮面が姿を現すのよッ！」

「な、何だよ、新しい仮面つて!？」

「……………『家無き仮面』」

「ま、マジかアアアアアアアアアア!？」

フフツツと微笑むジルと、完全に信じ込んだクリス。二人とも、ここはアメリカだ。安達 実はいない。ダメだ……この二人には何も期待してはいけないような気がしてきた。

「うっ……うっ……あ……？」

お、俺はダレだ？ ああ、そうだ……俺はバリーだ。で、ここはドコだ？ ああ、そうだ……山中の謎の洋館だ。そう、俺は仲間にはついたらかきにされた上、頭上に鈍器を落下させられ、一時的に行動不能になっていたんだ。そして、またしても仲間の姿は見えず、静寂が支配する大きな食堂の中で一人ぼっち。

（勘弁してくれよ……！ メチャメチャ心細いよ……！）

バリーのウサギ並に脆弱な心臓がバクバクいつてるし、少々ヨロめきつつ辺りを徘徊し始める姿からは、特殊部隊の精鋭という社会的立場など微塵も感じられない。哀れ過ぎて全米？1の涙を誘いそうだ。

「よ……し、こうなったら行ってやる……」

男38歳、巨大な洋館内部を一人で搜索。彼にとってはカナリ重大なザ・決断と言えるだろう。

バタンッ！

バリーは小さい方のドアから食堂を出て、ティールームを通過（ケネスの遺体が視界に入らないよう慎重に）し、カラスの羽が散乱する鳥カゴ近くの階段を上る。そして、正面に見えるドアを開けて更にまっすぐ行った所のドアまでたどりついた。つまり、ウエスカー達とは別のルートだ。

バタンッ！

「……………何だよ、コレって？」

ドアから入ったすぐ右隣に大きな西洋甲冑が飾られており、銀色の盾をかかっている。そして、その盾には文字が刻まれていた。

死は全ての始まり

(や、やめろよオ〜)……不吉なコト書くんじゃねえよ……)

バリーは自分の背中にイヤな汗が伝うのを感じて、思わずコルトに手をかけた。

「お、恐れるな、俺！ この愛銃がある限り、どんなバケモンが出てきても一発で退治してやる！」

彼はそう自分に言い聞かせて、前に見える階段を駆け上がった。階段の先にはU字になった狭い廊下があつて、その廊下には……

(何だ？ 線路か?)

明らかに何かが移動するための細長い線路が敷かれている。その線路をたどっていくと、床の上に四角の石板みたいなモノが設置されていて、石板の表面には1本の『鍵』がセットされていた。だが、その石板にも文字が刻まれており……

紋章を奪う者に死の喜びを

……とある。

(またかよ。もっと楽しそうなコト書けよな…… “この館の主人はスケベという理由で死んだ”とか)

バリーの望む楽しさの基準がよく分からない。彼はその鍵をとりあえず無視し、廊下の先に行く。突き当たりには、さっき見かけた西洋甲冑と同じモノが飾られていて、同様に銀の盾をかかっているで、またしても盾に文字が刻まれており……

死こそ全て

「全くよオ〜)……ここの住人はどれだけ死が好きなんだよツ！ それともアレか？ あの鍵を奪うと神の怒りに触れて罰せられるって寸法なのかツ!？」

恐ろしい言葉で混乱するバリーだったが、わざわざこんな箇所を館の中に造って設置してある鍵だ。何か重要な役割を果たすモノに



な音がだんだんと大きくなっている。

「あ、そうかつ」

カチャ……

バリーは何か気づいて持ってた鍵を元の位置に設置し直した。  
すると。

ズズズズズズズズ……

石板がせり上がり、移動した左右の壁が元の位置に戻り、退路を塞いでいた甲冑は突き当たりに後退し、彼を斬殺しようとしていた甲冑も後退して静止した。

「……………」

バリー、九死に一生を得る。彼は数十秒間の沈黙の後

(おお〜、神よ……俺にまだ生きるとおっしゃるんですね)

床にへたれこみながら、とつても幸せそうな表情でもう一度天を仰いだ。ズボンの股の間をビッチャビッチャにして。

> i 3 4 1 3 4 — 3 9 6 1 <

「やっぱりダレもいやしねえ……」

玄関ホールまで戻ってきたバリーが周囲を見渡すが、仲間の姿は無かった。このままこの安全地帯で待機する方が精神衛生上は好ましいのだが、万が一、ウエスカー達に見捨てられた場合、ほぼ百パー孤独死する自信があった。だから、ここは少しでも行動範囲を広げ、仲間達と出会う可能性を高めた方が安全にこの洋館から脱出できるはず。そういう考えに至ったバリーは

バタンツ!

食堂とは反対方向の部屋の扉を開き、勇気を振り絞って中へと入って行く。

「ここは……………画廊か何かか？」

中央には肩に壺を抱えた女神像が鎮座しており、周囲の壁には大小様々な油絵が飾られた薄暗い部屋だ。そして、入ってきた扉の向



んやッ！>

ゾンビみたいな呻き声を上げるバリーに対し、ゾンビは彼の手をしっかりと握りしめて励まし、電気ショックで心臓マッサージ。

「は、はうううう　　ッッッ！ー！」

上半身をビクンツと震わせ、バリー……またしても九死に一生を得る。

<どや？　もう平気か？>

心配そうに見つめてくるゾンビ。

「ああ、すまない……君は命のお　　」

パアアアアアアアアアア

ンー！！

ゾンビ、頭部炸裂。大量の肉片がバリーの顔面にへばり付く。

「おい、バリー！　無事か！？」

大声とともにベレッタを構えたクリスが駆け寄ってきた。その後ろにはウエスカーとジルの姿も。

「俺、次の日曜に必ず教会へ行く。神様に祈ろうと思うんだ……外見は醜くても心は清いんだって……」

バリーが力無く呟いた。

## ダーウィンさん、進化論が否定されました

「す、すまない……まだ体がまともに動きそうにないんだ。俺はしばらくここで休憩して後から追いかけるよ」

「そうか、仕方ないな」

我々は精神的に著しく疲弊しているバリーを残し、探索を続行することにした。

「バリー、コレを」

そう言っただけでバリーがケータイとコスメポーチを手渡す。

「コレは……？」

「回復に時間がかかるようならモバゲーにアクセスしてちょうだい。イイ暇潰しになるわ。でも、ルナ ナにはアクセスしちゃダメよ。セクハラで訴えるわよ」

悪戯っぽく微笑んでみせるジル。

「ジル……オマエってヤツは。ありがとう、ありがたく受け取っておくよ」

仲間との大切な絆に思わず涙腺が緩みそうになる。

「で、ポーチの中には鼻毛切りバサミが入ってるから、またゾンビに襲撃されたら喉でも突いて自害してちょうだい」

今度はマジ気味に微笑んでみせる。

「ジル……オマエってヤツは。俺、必ず回復して自分の鼻毛を全部切ってから返すよ。もちろん、洗わずに」

仲間との大切な絆を心の中でポイツと捨てちゃう。

「よし、先を急ぐぞ」

ウエスカーが先導して先程の画廊に戻る。実はこの部屋、中央の壺を肩に抱えた女性像に『洋館1階の地図』が隠されている。が、地図は壺の中に入れており、周囲からは壺からはみ出た紙切れが見えているが……。

「クリス、あんな所に入っているくらいだ。なにか重要なモノに違

いない。なんとかして取れないか？」

私はクリスの現場観察能力を試すことにした。この部屋には隅っこに動かせる簡易棚があり、それを像の近くまで押していつて、棚に乗って地図を入手する……それがベストな方法なのだが。

「くツ、さすがに高くてジャンプしたくらいじゃ届かないぜ」

初めはダレでもそうする。問題はここからなのだ。言い換えれば、天井から吊り下げたバナナをチンパンジーがどうやって上手く取るのか。その智能テストに近い。踏み台を使ったり、長い棒で叩いてみたり。

「おい、ウエスカー！ この不自然に置かれた棚……動くぜ！」

よし、クリス。気づいてくれたか。まずは第一段階合格だ。だが、棚を使用するということさえ気がつけば、後は自然と使い方は限られて

ガシャアアアアアアアアアア

ツツツン！！

「よっしゃ、取れたッ！」

嬉々として地図を拾うクリス。コイツ……棚を持ち上げて壺めがけて投げつけやがった。思考が短絡的とかいうレベルじゃない。チンパンジーの実験を並行して隣合わせでやったとしたら、チンパンジーがクリスを見て「えッ、ちょ、マジでWWW」とかなりかねない光景だ。クリス、人類としてのポードーラインを下回る気なのか？（オマエ……どうして特殊部隊なんかに入隊できたんだ？）

正直、疑問ではあるが。とりあえず地図は手に入った。

ガチャ

「解錠できたわ、行きましよう」

ジルが墓地の地下室で発見した鍵を使って、開かなかったドアを開けた。その先はL字になった廊下が続いており、右側の壁には断続的に窓があつて、時々鳴り響いている雷の閃光がチェス盤のような模様の床を照らしている。

「いかにも何かが出てきそうな雰囲気じゃねえか……！」

「ああ、そうだな……特に窓の方には気をつける。どんな襲撃を受けるか分からん」

「後ろはあたしが警戒するわ」

クリスが窓の方を、私は前方を、ジルが後方へと視線を向けてゆつくりと進む。ホラーにありがちな展開としては、稲妻の閃光とともに窓ガラスが割れて

バリーイイイイイイイイイイ

ツツツ

！！

「うおッ、な……何事だッ!?!」

続けざまに二枚の窓ガラスが派手に砕け散り、そして

「わんわんおオオオオオ……!!」

稲妻の閃光を纏って、それぞれの窓から一体ずつゾンビ犬が飛び込んできやがった。

「くそッ、挟み撃ちかよッ！」

クリスが慌ててベレッタを構えたが、照準を合わせるよりも早く連中は駆け寄ってきて、彼の腕にガツチリと噛みついた。

「ボクの名前は『太郎』、栄えあるゾンビ犬一族の優秀な戦士なんだおッ！」

噛みつきながら自己紹介してくれた。そして、もう一匹の方は

「くッ……ちよつと！ 離しなさいよッ！」

ジルの脚にこれまたガツチリと噛みついちゃってる。

「ボクの名前は『次郎』、兄の太郎とともに一族の幹部をを目指す若きエースなんだおッ！」

どうやら兄弟のようだ。ゾンビ犬社会の事情とかは知ったことではないが、コイツ等は山中で襲ってきた連中よりずっと攻撃的で、強い。

「クリス！ ジル！ なんとか振りほどけッ！」

ゾンビ犬が飛び込んでくる事態も私の想定内。この不意打ちをどう乗り切るのか……さあ、二人とも見せてもらおう。

ガブリッ！

「い、痛いんだお〜！ こんな反撃は考えてなかったお！」

「どほはッ、はひっははッ（どうだ、まいったか）！」

見たままをコメントしよう………クリスがゾンビ犬に噛みついてる。背中にガッチリと。

（もうよすんだ、クリス！ 両親が見たら号泣するような光景だぞ！）

正直、直視できるレベルではない。人としての尊厳とは、これ程までに簡単に崩壊するものなのか？ あるいは彼が特別なのか？

「で、ジル………オマエはどうなってるんだ？」

「え？ 別に。特に不自由はないけど」

太ももに噛みつかれたまま、彼女は事も無し気に言う。

「いや、その〜……痛くはないのか？」

「うん、まあ、程良く痛いけど。無理に引きはがすのも面倒だし」

面倒？ 晩御飯の献立を決めるような軽いノリで言うなよ。犬一

匹が太ももからブラ下がつて、『ジル+ゾンビ犬』で別の生物兵器が出来上がってるよ。

「な、何だおッ………！ ボクの体が急に痺れて……きた……おッ」

ジルに噛みついていた次郎が、突然、ポトリと床の上に落ちた。

四本の脚をピクピクさせ、口からアワを吹き始める。

「何事だおッ！？ 弟よ、しっかりするんだおッ！」

太郎がクリスへの攻撃をやめ、倒れた弟のもとに駆け寄ってその体をペロペロと舐めてやる　と。

「は、はうッ　な……何が、起きた……んだ……お？　ボクの……」

…体が……けふッ」

パタッ

兄の方も床の上に倒れ伏してしまった。

「おッ、何かよく分からんがオレ達の勝利みたいだな。所詮はイヌ

ところ。人間様に太刀打ちできつかよ！」

ケンカに勝ったクソガキみたいにはしゃぐクリス。

「……ちよっと、アンタ等どうかしたの？」

ジルの方はどうも釈然としないので、仲良く寄り添って痙攣している二匹に声をかけてみる。

「ぼ、ボク達の体が……新種のウイルスに……お、侵された……お  
ち~~~~ん……」

太郎・次郎、戦死。

「ジル、オマエ一体……!？」

私は思わず身構えた。次郎はジルに噛みついて急変し、その次郎と接触した太郎が同様に急変して倒れた。もしか、既にジルはT・ウィルスに感染していて、彼女の体内でウイルスが突然変異を起こし、B・O・W・ですら昏倒させるような毒素を有したモノとなったのか？ 生物学上の可能性としてはありうるが、まさか……。

> i 3 4 3 7 6 — 3 9 6 1 <

「ジル、体に妙な違和感とかは？」

肩に手をポンツと置いてきたクリスが、ジルを真剣な目つきで見つめる。

「平気よ、別に何とも無いわ」

強がってみせるジルだったが、隠そうとする焦燥感がわずかに顔色を変えている。

「そうか。けど、辛くなったら真っ先にオレ達仲間を頼れよ」

「クリス……ええ、そうさせてもらっわ」

ジルが照れ臭そうに呟く。

「ウエスカー……一応、オレなりに考えてみたんだが」

「ほう、何だ？」

「さっきのイヌっころ、“新種のウイルス”に侵されたって言うてやがった。それはつまり」

野生丸出しの勘が、この事件の裏側に潜むT・ウィルスの存在を感知したのか!?

「ジル、オマエの病名は『ビッチ』。残念だが……現代医学ではどうしようもない」

ビシッとクリスが指差して断言。カッと光った稲妻の閃光をバツクに背負いながら。

「そ、そんなああああああああああああああああああああああ

ツツツ!?!」

ムンクの叫びみたいに溶けるジル。

「……………」

私はそんな小芝居を無視して瞑想し、文字通り犬死にした二匹のゾンビ犬をとむらってやった。迷わず天国へ逝けますよ……に。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7298x/>

---

たった今、現代医学が敗北しました

2011年11月7日12時02分発行